２０２３年度

総合型選抜Ⅲ　アジア事情探究型

適　性　検　査

一 次の文章を読んで、後の問い（問１〜６）に答えなさい。

「中国を理解する」ことは非常に難しい。

たとえば、少し前に話題になったことに「爆買い」という現象がある。中国の人たちが日本へやってきて、様々な物を大量に買うという現象である。あまり知られていないかもしれないが、爆買いをする人たちは、中国国内では成功したお金持ちである。その人たちが日本に来て、ウォシュレットやら何やらを大量に買って行く。

私は文学を研究しているから、爆買いをする人たちの精神構造はどうなっているのかと考える。しかしなかなか想像がつかない。爆買いが話題になったとき、テレビや新聞などで様々な解説があった。日本製品が優れているから買っていくという説明は、事象の説明としては納得できるけれど、「爆」と言われるほど(a)カジョウに購入する精神のあり方までは説明できていない。

では中国の人たちは自らの行動を解説できるのかというと、実はそうでもない。中国の人が、自分たちが爆買いするときの精神構造についてわかりやすく話してくれればいいのだが、そういうコメントはほぼ見当たらない。中国で成功した人たちが、日本に行って便器を買ってきた。これはむしろ、中国国内の人にとって、とても衝撃的なことである。その衝撃に打ちひしがれているように、私には思える。

おそらく、今、中国の人たちの精神状況は大きな混乱をきたしているのではないか。社会主義時代にはある種の秩序があった。「人間はこうするべきである」という一つの基準があった。今では、社会主義時代の基準は、人間性を抑圧するものとされて、信じる人はほとんどいなくなっている。ところが、それが急速に崩れたあと、新たな基準、「こうするべきだ」という秩序が打ち立てられていない。そういうことなのではないか。

文学の問題に引きつけて言うならば、彼らは、今、言語・言葉によって明確に自己を表現できない状況にあるのではないか。あまりにも事態が複雑で混乱しているため、言葉が追いつかない状況にあるのではないか。私はそう感じている。

そういうときこそ文学の出番である。

文学には様々な読み方があり、正解があるわけではない。文学は、明晰な言葉によっては説明できない、ぼんやりとした空気のようなものを、物語、虚構、フィクションの力によって、逆説的ながら、ぼんやりと読み手に感じ取らせることができる。そこにこそ文学の力がある。そのような観点から、最近の(1)中国文学で私が面白いと思うものを紹介したいと思う。ここでとくに紹介したいと思っているのは、農村に関する文学である。

今の中国に生きる人々の精神構造は大きな混乱に直面している。その中でもわかりづらいのが農村の問題である。(中　略)

(2-1)では、中国の農村はどのような場所なのか。私は、二年前、中国の農村を自分の目で見て、一週間近くそこで寝泊りするという非常に得がたい経験をすることができた。ある友人が、「僕の故郷を見せてあげよう」と言って、彼の両親が住んでいる山東省の農村に連れて行ってくれたのである。彼は実は北京のトップエリートなのだが、幼少時は農村で暮らした経験を持っている。だから、農村は、都市の人にとって距離感のある問題でもあり、自分の生まれ故郷の問題でもある。今は都市で違う生活を送っているけれども、決して他人事ではない。ここに、中国の問題の複雑さがある。

私の訪れたその村はなかなか美しかった。すぐ近くに山があり、村の周りは丘陵になっていて、丘陵に段々畑がある。ただ決して豊かではない。水田はなく、主たる生産物の一つは(3)トウモロコシであった。日本に輸出しているそうだが、最近は日本人が買ってくれないから安くなったと、冗談交じりで(b)グチを言われた。そのトウモロコシや小麦などの作物が段々

畑で作られている。

彼の実家の家には中庭があり、そこに自家用に野菜を植えている。日本と違って、家屋は木造ではない。中国には木造住宅はほとんどなく、基本的にレンガ造りである。お手洗いは中庭の一角にあって、人の排泄物を溜めている。肥料になるからである。昔ながらの生活スタイルが残っている。最近では泥棒が増えてきているため、どこの家も(c)ガンジョウな門を作る。ガスレンジもあるがあまり使っておらず、昔ながらの釜でご飯を作っている。食べ物は非常に新鮮で、美味しかった。

生活用品が必要になったときには、市場へ買い物に行く。五日に一回、近くの集落に市場が出る。そこまで歩いて行く。山を一つ越え、歩いて三〇分ぐらいだった。市場には肉屋や洋服屋、金物屋などいろいろな店が出る。市場へ買い物に行く人がいる一方で、そこに店を出す人もいる。彼らは市場に自分の農産物・畜産物を持っていき、それを売ったお金で必要な物を買って帰る。家と、畑と、市場と、基本的には、歩いて行ける範囲内で生活が完結する。以前の農村では、中学校ぐらいまではこの徒歩圏の範囲内にあったという。高校になると離れたところに出て行くが、かつては農村の人が大学に行くことはほとんどなかったので、高校を卒業するとまた村に帰ってきた。(2-2)私はその圏内を歩くことで、農村の生活の感覚を実体験できたわけである。(中　略)

最初の話に戻ろう。

爆買いの報道を見ると、私たちはたいてい「中国人はお行儀が悪いな」と思う。(4)しかし私は、それと同時に「中国では、何かが崩れているのではないか」と感じる。ここでは、その手がかりについて考えてみたかったのである。

爆買いしている人には農村出身の人もいれば、都会出身である程度収入を得ている人もいるだろう。実は都市でも農村とほぼ同じことが起こっており、小説などを読むとそういう描写が出てくる。だから、全体的なイメージとして、次のように

想像してみてほしい。

確かに生活は豊かになったが、しかし子供の頃に持っていた夢が、完全に崩壊してしまっている。しかもそれは、崩壊というよりは破壊とも言うべき、悲しむべき形で失われている。それに代わる新しい何かはまだ見えてこないし、必ずしもそれが手に入るとは限らない。あるいは廃墟がいつまでも続くのかもしれない。他方で昔に戻りたいけれど、もはやそんなことはできない。どちらに向かったらいいのかわからず、まさに五里(d)ムチュウの状態にある。今の中国の人たちを見ていると、私はついそう思ってしまう。

(5)そのような境遇にいる中国の人たちの精神を「理解」することが、いかに難しいか、わかるだろう。ただ注意しておきたいのは、「中国を理解する」とは、中国の人たちの苦悩を高みから見物し、同情することではないことだ。同情しようとした瞬間に、中国の人たちの苦悩の深いところにある、言葉で表現しきれない部分は、取り逃されるに違いない。私たちにできることは、彼らの苦悩について答えを言うことではない。そうではなく、彼らの苦悩に共感し、言葉にならないぼんやりとした苦しみを分かち合うことではないだろうか。文学はそのための手がかりになりうる。

ここで紹介したのは、中国の文学のほんの(e)イッタンに過ぎない。私としては、多くの文学作品に触れることで、中国の人たちの精神の奥深くに思いをはせていきたいと思っている。

（鈴木将久「現代中国の諸相」光田剛編『現代中国入門』による。出題の都合上、一部中略・改変した所がある）

問１　波線部(a)〜(e)の片仮名を漢字にしなさい。（配点10点）

（a）カジョウ　（b）グチ　（c）ガンジョウ

（d）ムチュウ　（e）イッタン

問２　傍線部(1)「中国文学」とあるが、唐代は中国詩歌の黄金期と言われる。盛唐期の最も著名な詩人の一人である杜甫の作で、「国破れて山河在り」ではじまる詩の題名を答えなさい。（配点６点）

問３　傍線部(2-1)「では、中国の農村はどのような場所なのか。」の一文から、傍線部(2-2)「私はその圏内を歩くことで、農村の生活の感覚を実体験できたわけである。」の一文までの内容にタイトルをつける場合、最も適切なものを、次の①〜④の中から一つ選びなさい。（配点６点）

①　都市から帰ってきた人々が求めた生活
②　人里離れた丘陵地帯の生活
③　家、畑、市場で完結していた生活
④　貧しい人々の困難な生活

問４　傍線部⑶「トウモロコシ」とあるが、南米原産のトウモロコシが中国へと伝来したのは明朝の時であった。明朝の初代皇帝の名前を答えなさい。

（配点６点）

問５　傍線部⑷「しかし私は、それと同時に『中国では、何かが崩れているのではないか』と感じる」とあるが、筆者はその理由をどのように考えているのか、文中の語を用いて百四十字以内で説明しなさい。

（配点12点）

問６　傍線部(5)「そのような境遇にいる中国の人たちの精神を『理解』することが、いかに難しいか、わかるだろう」とあるが、それでは筆者はどのようなことが必要だと考えているのか。「～ではなく、～こと」という形式で、七十字以内で説明しなさい。

（配点10点）

60

70

二 次の文章を読んで、後の問い（問１～６）に答えなさい。

二〇〇〇年は二〇世紀の最後の年であった。中国では、二一世紀は二〇〇〇年からか、それとも二〇〇一年からなのか、一時議論がかまびすしかったという。一九九九年の暮れに世紀末の議論が(イ)沸騰した反動か、二〇〇〇年の暮れから二〇〇一年の年頭は、やや落ち着いた(a)フンイキの内に経過したようである。

しかし、いずれにせよキリストの生誕にちなむ時間の区切りで私たちの生活時間を区切ることが当たり前になっている。これは、考えてみればキリスト者でない私たちにとって、不思議なことである。百年前、二〇世紀が始まったころの中国では、清朝皇帝の定める紀元が用いられていた。皇帝は天の命を受けて、地上の時間を(ロ)主宰するものとされていた。それゆえ、［　　A　　］は、じつはありうべからざることなのである。

だが、西暦を使用する大勢には抗しがたいものがあった。日本では、天皇の定める年号の制度を残しながら、明治のはじめに太陽暦にきりかえた。おなじように、辛亥革命で成立した中華民国はそれまでの(1)太陰太陽暦を太陽暦に改め、同時に、紀年には「中華民国〇年」とする制度を採用した。これは、現在に至るまで台湾の「中華民国」に継承されており、日本でいまなお天皇の年号を残しているのと一脈通ずるものがある。

一九四九年に成立した中華人民共和国においては、年の呼び方も西暦に改められることとなった。世界の趨勢にしたがったまでともいえるが、もう少し深い意味もあるように考えられる。中国革命を進めた(2)中国共産党は、社会主義社会の建設を求めたが、それは中国一国の変革だけを考えていたのではなく、世界史的な観点から資本主義の時代が社会主義の時代へと移行することを視野に入れていた。

このような、資本主義の時代から社会主義の時代へという、発展段階論にもとづく歴史観は、一九世紀のヨーロッパで生

まれたものであったが、そこから出てきた社会主義の考え方を、二〇世紀半ばに東アジアに新しく誕生した人民共和国は、いわば「国是」としたのである。紀年を西暦にすることも、そうした流れのなかでうけ入れられたものと思われる。ただ、生活に根ざした時間の感覚からすれば、二一世紀を迎えた今でも、新年は農暦（旧暦）の「春節」でなければならない。二〇世紀の百年を経過しても、人々の基本的な時間意識は、なお切り替わっていないというべきかもしれない。ただ、近年では日本の場合と同様に、年末のクリスマスの狂騒が加わる事態となっている。「聖誕」から「春節」に至る年末・年始の風景は、中国の二一世紀を考える上で、象徴的な意味を有することがらである可能性もある。

中国が西洋近代に由来する社会主義を今なお国是として標榜し、近年では「聖誕」の狂騒さえ定着しつつあるいっぽうで、西洋近代は(b)イゼンとして中国を圧迫し、侵略した植民地主義的な「帝国主義」として(ハ)把握されることが多い。それを端的に示す事件が二〇〇〇年の九月から一〇月にかけて発生した。ヴァティカンが清代に中国で活動し、迫害を受けた宣教師たちを聖人に列したことに対して、中国政府が強烈な反発を示すと、中国の新聞やマスコミは、キリスト教宣教師の中国における活動は、基本的に西洋列強の中国侵略の先兵としての役割を果たしたものであり、宣教師たちは帝国主義の手先であった、というキャンペーン記事を、連日のように報道する事態となった。

(3)中国社会の近代的な変容を、歴史的に明らかにしようと考える人々や、中国史のある特殊性を人類史的な(ニ)普遍性との関連において検討しようとする論者たちは、一九八〇年代から九〇年代にかけて、中国革命のキーワードであった「反帝国主義・反封建主義」という決定論的な規定を回避または(c)クウドウカさせながら、近代の中国内・外の情報交換、相互影響の実態について、多様な再検討の可能性を探る努力を展開してきたが、このたびのヴァティカン列聖問題に端を発するキャンペーンは、そのような努力にまたしてもときならぬ冷水を浴びせるような効果をもつものであった。

ここで、時期遅れにも、いわゆる「近代主義」の重要性を議論しようとしているのではない。しかし、アメリカに次ぐ移動通話大国となりつつある中国において、なおその政治体制を支える社会主義の考え方を生みだした一九世紀的な西洋近代について、これを、中国に対する加害者、中国の主権と(d)ソンゲンを犯した侵略者として一面的に捉える傾向が非常に強いことに、あらためて着目せざるを得ない。

問題は、政府筋から来る政治的なキャンペーンという範囲に限られるものではないようである。近代社会および近代的な国際関係を成り立たせている原則的な約束事について、その形式的な重要性について留保することが難しいという状況を認めざるを得ない。いわゆる「近代史」が、中国においては不平等条約によって主権が損なわれたとされるアヘン戦争に起点をもつという大前提は、なお牢固として存在しているようである。そのことが意味するものは、やはり重大である。

アヘン戦争から「開国」の時期に展開した、東西の異質なシステムの邂逅と(ホ)衝突に着目し、その間の事態の展開を当時の事実に即して再構成しようとする議論も存在するが、なお、決定的な力を持つに至っていないというべきかも知れない。

そして、西洋および東洋（すなわち日本）の帝国主義に制約を受けるかたちで進行した中国における近代史の特質について、それを外来の刺激との間の(e)キンチョウ関係をバネとしつつ、双方向的、かつ立体的に把握する認識の方向性は、いまなお、政治的立場の問題に従属させられてしまう危険性を孕（はら）んでいるのである。

（並木頼寿『東アジアに『近代』を問う』による）

問１ 波線部(a)～(e)の片仮名を漢字にしなさい。（配点10点）

（a）フンイキ

（b）イゼン

（c）クウドウカ

（d）ソンゲン

（e）キンチョウ

問２ 波線部(イ)～(ホ)の漢字を平仮名にしなさい。（配点10点）

（イ）沸騰

（ロ）主宰

（ハ）把握

（ニ）普遍性

（ホ）衝突

問３　空欄Aを補うものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。（配点６点）

①　私たちが独自に生活時間を区切るなどということ

②　西暦の区切りが時代の変化と結びつくなどということ

③　西洋人が西暦を用いるなどということ

④　皇帝が紀元を定めるなどということ

問４　傍線部⑴「太陰太陽暦」とあるが、中国元朝の時代に郭守敬らによって作成された太陰太陽暦の名前を答えなさい。（配点６点）

問５　傍線部⑵「中国共産党」とあるが、一九一〇年代に新文化運動の担い手として雑誌『新青年』の創刊に携わり、後に中国共産党の初代総書記となった人物の名前を答えなさい。（配点６点）

問６　傍線部(3)「中国社会の近代的な変容」とあるが、筆者は中国においてこれを理解する上でどのような点に問題が存在すると考えているか。百五十字以内で答えなさい。

（配点12点）